

能登大納言小豆優良系統の選抜と栽培法

石川県農林総合研究センター 農業試験場

1. 背景・目的

能登大納言小豆は奥能登で栽培されており、粒が大きく、鮮やかな赤色を呈し、風味が良いことが特徴である。しかし、産地では次のような問題点がある。

- ①多数の在来系統が栽培されているため、品質が安定しない
- ②成熟が揃いにくく、一斉収穫ができず、収穫が手作業のため手間がかかる。
- ③夏期の高温による着莢数が減少し、収量が不安定となっている。

そこで、栽培系統を統一し、品質向上を図るため、粒大や粒色等の品質が優れた系統を選抜するとともに、一斉収穫に適した栽培法および高温対策として晩播での無培土狭畦密植栽培を検討した。

2. 技術のポイント

1) 優良系統の選抜

奥能登の在来11系統中、粒大や粒色、成熟期の点から、能登町旧柳田地区由来の系統「能系1」を選抜した(図1)。

2) 一斉収穫に適した播種期と栽植密度

11月中旬の降霜前に成熟期を迎え、収量を確保するには、7月17~23日に播種し、栽植密度を条間80cm、株間20cmの1株2本立てとする。

3) 晩播における無培土狭畦密植栽培

晩播では生育期間が短いため、減収となりやすいが、栽植密度が慣行の2倍となる無培土狭畦密植栽培することで、慣行栽培(標播培土)と同等以上の収量が得られる(図2、3)。倒伏および収量性の点から播種適期は7月30日~8月3日頃である。



図1 能登大納言小豆「能系1」



図2 晩播における無培土狭畦密植栽培
上 培土区: 条間80cm、株間20cm、2本立て
下 無培土狭畦密植区: 条間40cm、株間10cm、1本立て

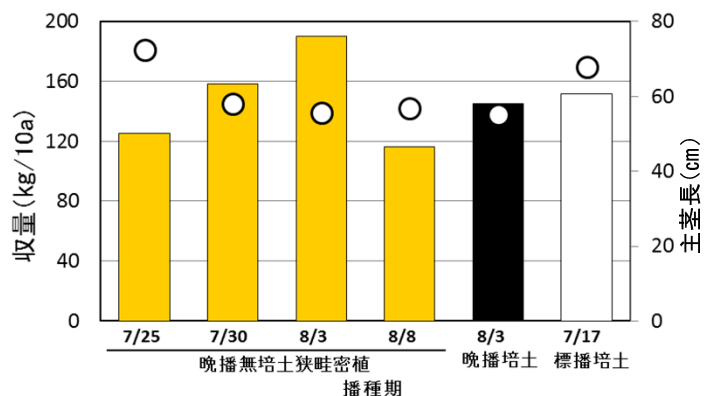


図3 無培土狭畦密植栽培の播種期の違いによる生育と収量

○は主茎長(cm)を示す。